

**農業・建設・産業機械などの部品、ユニットを製造する。従来、プレス工程は機械加工や溶接工程などと比べて内製化が遅れていたが、2021年に2台のAIDA製プレス機を導入。この方針が的中し、受注量を増やすなど大きな成果を上げている。**

## 株式会社富士

### 耕運機メーカーとして出発

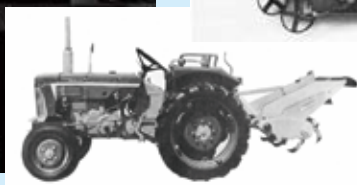
岡山市に本社を置く(株)富士は、1920年に藤井鉄工所として創業。藤井康弘氏(藤井康代現社長の父親)が1927年に日本で第一号目の実用化耕運機を発明・完成させ、1931年には日本初のロータリー式耕運機「丈夫号」を発明・完成させ、富士耕運機と言う名前で、世間の注目を集めた。1960年代初めまでは耕運機メーカーとして鳴らしたが、その後、耕運機エンジンの製造をヤンマーグループに委ね、自らは農業機械、建設機械、産業機械などの部品とユニット製造の専業となり現在に至っている。材料手配から加工、溶接、塗装、組立までの一貫生産を特徴とし、野菜結束機などの自社製品も製造している。

### 業務のデジタル化を推進

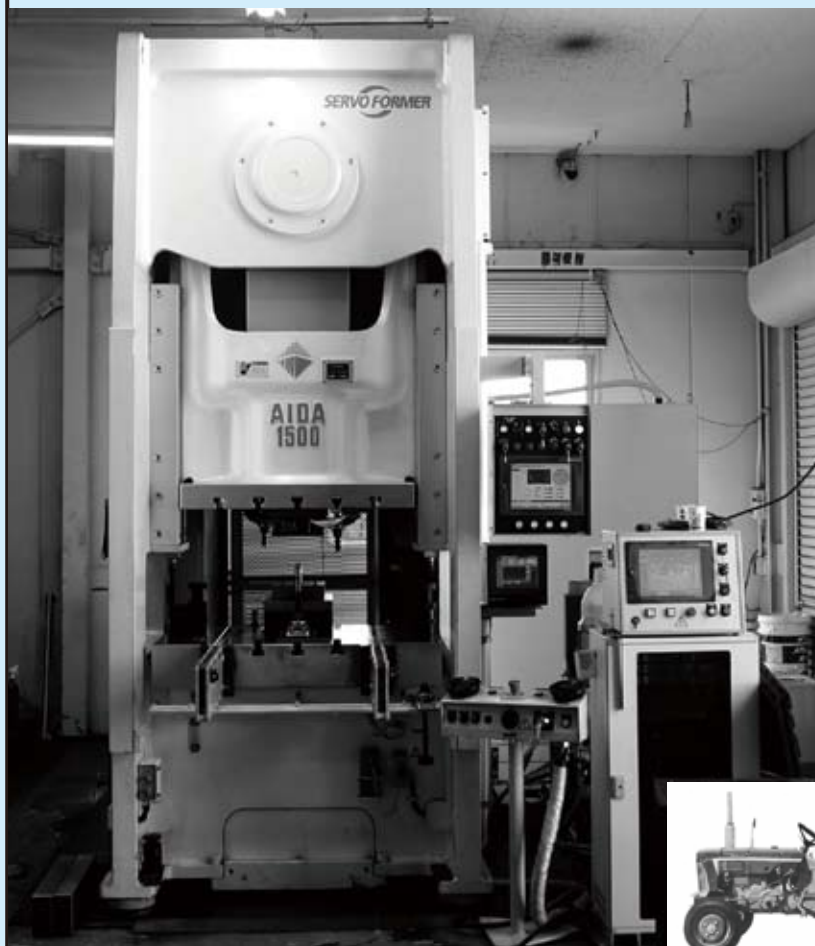
同社の強みは卓越した技術力にあり、「技術の富士」として顧客から大きな信頼を得ている。その半面、経営課題もあった。現場作業が属人的な感覚に委ねられ、平準化や標準化が遅れるなど管理面に問題があったことだ。その改善に力を注いだのが2005年に社長に就任した藤井氏である。「お客様から納期を聞かれ、作業者に尋ねると、同じ工程なのにある人は『5分かかる』と言うし、別の人は『8分かかる』と言うなど、人によってマチマチだったのです。作業時間が正確に分からないと適切な納期回答や見積もりができず、経営的にもマイナス要因になっていたのです」と藤井社長は話す。

しかも、価格、品質、納期の競争はますます激しくなり、生き残るためには生産性向上が不可欠となった。そこで、新たに生産管理システムを構築し、それをベースにあらゆる現場情報を可視化して管理の向上を図る、「デジタル化を切り口としたモノづくり」へと舵を切ったのである。きめ細かな生産管理を行うようになった結果、一時は4割近くあった納期遅れが皆無になるなど一定の効果を上げたが、「同業他社との差別化を図るには、誰もが一目で理解できる現場そのもののデジタル化も必要であり、現在、その取り組みを強化している最中です」(藤井社長)。

国産初のロータリー式耕運機「丈夫号」  
ますらお



1964年製造の耕運機



▲ ダイレクトサーボフォーマー DSF-N1-1500(150トン)